

モリンホール（馬頭琴）の伝統と新しい世界

モリンホールは「馬頭琴」を表すモンゴル語である。この楽器は「スーホの白い馬」という物語によって日本で広く知られるようになった。物語の主人公の名前は正しくは「スフ（またはスヘー）」なのだが、それが「スーホ」になってしまっている。それは、この物語が内モンゴル・チャハル地方（現在は中国の一部）の物語とされ、中国経由で日本に伝わったことと関係があるらしい。内モンゴルの北に連なるモンゴル国では「フフナームジル」という物語がよく知られている。歌の上手な青年ナムジルが、モンゴル東部の故郷から兵役で西部辺境へ赴き、そこで恋人ができる。兵役を終えて帰郷したナムジルは、その恋人から贈られたジョノンハルという翼をもった黒い馬に跨りたびたび会いに行く。ところが、ある日、ジョノンハルは、猜疑心と嫉妬心をいだいた近隣の娘によって翼を切られて死んでしまう。ナムジルは、愛馬の体の一部で楽器を作って演奏し、西部にいる恋人や愛馬のことを偲ぶという物語である。モリンホールは、匈奴の時代から数えるならば二千年以上の歴史をもつ楽器であり、その誕生物語には様々なバリエーションが存在する。「スーホの白い馬」だけを読んでいては、モリンホールの一面しか理解したことにならないだろう。

モリンホールの演奏には独奏のほか重奏もあり、ヨーチン（揚琴）やヤトガ（琴）とのアンサンブル、さらに民謡やホーミーの伴奏など、モンゴル音楽の世界では活躍の場が幅広い。草原を吹くそよ風、川のせせらぎ、山々のひびきなどモンゴルの雄大な自然の音ばかりでなく、馬、駱駝などの家畜や野生動物の走る様子、鳴き声などをたった2本の弦で活き活きと描写することができる。モリンホールはモンゴルを代表する民族楽器のひとつであると言ってもいいであろう。

「民族楽器」というイメージは強いが、ピアノとのアンサンブル曲を聞くと、何か西洋的であり

1

驚きさえ覚える。上記のようにモリンホールは長い歴史をもっており、時代とともにその形を変えてきた。20世紀はじめに草原の国に革命がおこり、ロシアの影響力が強まるにしたがって西洋文化の流入が始まり、モリンホールは半世紀ほど前に現在の形になった。気象条件の異なる外国公演でも安定した演奏ができるよう胴に張られていた皮が木板にとって代わられた。モリンホールの弓と弦には馬の尻尾が使われているが、これも外国ではナイロン弦に張り替えて演奏される。内モンゴルでは、国内で使用するモリンホールの弦もナイロン製が一般的である。何よりも胴の表板にあいているf字形の響孔を見れば、モリンホールがすでに純粋な草原の民族楽器でないことは明らかであろう。モンゴルに生まれながら西洋文化をどん欲に吸収してその形を変えながら発展してきたのが現在のモリンホールであり、モンゴルの音楽にとどまらず世界の音楽を奏でる楽器であることは言うまでもない。モンゴルから世界へ、グローバルな時代にふさわしい楽器、それがモリンホールなのだ。

このCDが生まれたのは、モリンホールの音色を聞いてほのほとした気分になった経験がきっかけになっている。このような経験を多くの人と共有したいと、2002年秋と2003年春に関西の数ヶ所のホールで「癒しの馬頭琴コンサート」を開催した。その際の選曲、アレンジ、奏法などがCDの収録曲には反映している。「モリンホール＝民族楽器」という既成のイメージとモリンホールの音楽的な可能性を表現したいという強い思いが重なりながらCDは完成した。バトエルデネは、モリンホールという楽器の特徴を多くの人に知ってもらいたいと全身全霊を込めて演奏している。モリンホールの伝統とともに、その頑強さとしなやかさでモンゴルを飛び越えようとするモリンホールの新しい世界をも体感していただければ幸いです。

内田敦之（オフィス・モンゴル）

2